

編集後記

本号から印刷物としてではなく、電子媒体として発行することになった。これまでと同じように名古屋大学附属図書館のレポジトリに登録されるとともに、技術教育学研究室（横山研究室）のHPに掲載される。研究室のHPには、室報全体をPDF化したものを掲載する予定である。

石原論文は、石原氏が Christer Ericsson や Björn Horgby と共著でスウェーデン語を用いて出版された”Faderliga företagare i Sverige och Japan”(Carlsson Bokförlag, 2015)の執筆内容をもとに主要な論点を日本語で執筆していただいたものである。

田中論文は、イギリスにおける Modern Apprenticeship をめぐる動向を紹介したものである。

「製図とスロイドの関係について」の翻訳は、オットー・サロモンが晩年にそれ以前に発表した論説を集めて1905年に出版した”I Pedagogiska frågor”（『教育学の諸問題』）の中に収録された一つの論説を翻訳したものである。この本は英語には翻訳されていないので、スウェーデン語で書かれたものしか存在しない。この本に収められた各論説は、ネースにあるスロイド教員養成所から月1回発行された“Slöjdundervisningsblad från Nääs”（『ネース・スロイド教育新聞』）に連載されたものである。サロモンはその中から28の評論や論説を選んで1冊の論集として出版した。今後もこれらの論説や評論を日本語に翻訳して本誌に連載していく予定である。

本号では、ロシアの教師の論考を4本掲載した。V. Latkov 氏の論考は、彼が修士論文として取り組んだ、ロシアにおける手工科、手の労働、労働科の歴史に関する論文の内容の一部を紹介したものである。今回はロシア語で書かれているが、せめて英訳を後日掲載できればと考えている。私はこの5、6年間に3度モスクワに滞在したが、そのたびに彼の学校（一般陶冶学校 No. 29）を訪問した。その学校は、「テクノロジー」の授業をととても大事にしてきた伝統があり、木工室や金工室だけではなく、鍛冶をおこなう実習場が別棟としておかれていた。この建物はかなり以前に建築されたもので、当初から鍛冶場として利用されてきたことが推測されるものであった。その他に陶芸室やテキスタイルの部屋（女子生徒が対象）、調理室（これも女子生徒が対象）など多くの実習室をこの学校は抱えていた。この教科の名称は、「手の労働」「労働科」から「テクノロジー」に変わっても、この学校で教えている内容の多くは、以前から教えてきた内容を大事にしている印象を受けた。この学校教師である V. Latkov 氏も、かつてこの学校の生徒であり、自分が生徒時代に学んだことを生徒に教えていると、彼が生徒の時に作った作品（西洋式の鎧）を示しながら私に語ったことが強烈な記憶として残っている。

（横山悦生）